中井正一再考
——集団的思惟の機構について——

門　部　昌　志

Masakazu Nakai Reconsidered

Masashi MOMBE

一　中井正一の生涯

中井正一（一九〇〇～一九五二）は，周知のように，論文「委員会の論理—— 一つの草稿として」（以下，「委員会の論理」と略記）によって知られる美学者である。日本ファシズムの台頭した一九三〇年代において，中井は，集団的主体性の論理を探究しつつ，隔週刊の新聞『土曜日』や同人雑誌『世界文化』を通じた反ファシズム文化運動に参加した。

中井は美学者を自認していたが，しかし特異な美学者であった。既存の芸術観が芸術と機械を対立させていたのに対し，中井は機械のもつ美を論じてみせた。そして映画の価値が今日のようには確立されてはおらず，ようやく芸術として認知されつつあった時代，彼は色彩映画の実験に関わり，映画を積極的に論じている。中井はまた，スポーツや探偵小説，さらには新聞も美的観点から論じている。極めて多彩な彼の研究で共通するのは，芸術から逸脱するものを排除せず，むしろそれらを梃子にして独自の美学を模索する姿勢である。「ジャズ，レビュー，スターシステムのキネマ等は拙きその過渡現象である。それが未だ拙劣であるからとて，未來の美に悲しみを持つ必要はない」[注1]。彼は芸術と非芸術の境界線に固執するのではなく，現在の非芸術が未来に芸術へと移行する可能性に気がついていた。なかでも，映画には，集団性，利潤性，レンズなど当時の芸術観とは異質な要素が含まれており，中井が新しい美学を創出する契機となった。それはまた集団的主体性の論理を構想する際のモデルの一つとなった。

新たな美学に関する中井の探求は，一九三〇年代の危機的状況のなかで政治的性格を露にしてゆく。一九二〇年代半ば，「カント判断力批判の研究」（卒業論文）から出発した中井は，その後，カッシーラーとハイデガー，そしてヘーゲルやマルクスらの思想を批判的に摂取しつつ，一九三六年，独創的な論文「委員会の論理」を『世界文化』で発表した。一九三〇年に中井はカッシーラーの機能概念を手がかりにして関係論的思考を受容した。それはさらに，主観と客観を対立したものと看做す形而上学的な二分法を批判し，二項が相互に転換する動的な思考へと発展した。しかし，次第に中井はこの機能の論理が抽象的なものへと転化したと考えるようになり，機能主義の論理を超克する地点に到達する。そして，自己関係的な否定によって分裂し，非実体性を特徴とする過程としての弁証法的主体性を集団的主体性へと展開した「委員会の論理」を中井は執筆する。

三〇年代の中井による探求は個人的主体への批判から集団的主体性へと向かうものであった。この知的探求は種々の実践によって媒介されていた。水平社と繋がりのあった消費組合運動への参加をはじめ，『美・批評』や『世界文化』といった同人雑誌や隔週刊の新聞『土曜日』等を通

じた反ファシズム文化運動に中井は関わっていたのである。『美・批評』を創刊する一九三〇年から治安維持法の嫌疑によって検挙される一九三七年までの間，同人雑誌や新聞などのメディアを通じた中井の活動は，美学的なものから政治的なものへ，そして高踏的なものから大衆性を含むものへと重層化していくかのようである。一九三〇年，中井を含む京大の美学研究者グループは，「美学・芸術学・芸術史の理論的研究誌」，『美・批評』を創刊する。しかし，一九三三年四月，瀧川事件によって同人雑誌『美・批評』の刊行は中断を余儀なくされる。その後，事件の際に法学部支持の運動を展開した新たな同人たちを加え，『美・批評』は学問的自由の擁護を標榜しつつ再出発することとなる。一九三五年二月，より政治化された第二次『美・批評』は改組・改題を経て，反戦・反ファシズムを志向する同人雑誌『世界文化』へと発展する。この『世界文化』では，中井の「委員会の論理」，あるいは久野収によるホルクハイマーの訳述（「現代哲學における合理主義論争」）など理論的な論考の他，世界文化情報も掲載されており，フランスやスペインにおける人民戦線の動向が紹介されていた。この『世界文化』は読者が限られていたため，世界文化グループは一層大衆的な運動が必要であるとの見解に達した。こうしたなか，『京都スタヂオ通信』を発行していた庶民的な俳優，斎藤雷太郎と世界文化グループが協力することにより隔週刊の新聞『土曜日』が刊行される。中井正一は，巻頭言を精力的に執筆するなど，『土曜日』に積極的に関わっている。一九三〇年代における同人雑誌を通じた集団的な研究活動は，一方では集団的主体性に関する中井の探求を深化させ，他方ではそれを反戦・反ファシズム文化運動へと導いた。

しかし，一九三七年十一月，『世界文化』と『土曜日』に関与した中井は治安維持法違反の疑いから検挙される。そして一九四〇年十二月には懲役二年，執行猶予二年の判決が言い渡される。京都で保護観察下の生活を送りながら，中井は転向と解釈しうる文章を書き綴っている。

その後，中井は，疎開のため郷里，広島に移ることになる。彼は尾道市立図書館長に就任し，敗戦を迎える。終戦直後，地方では，良書は貨幣の代わりとなって闇的物資の交換の方に流れていた。農村の文化欲は飢渇のままに放任されていたのである。書物不足という状況に直面した中井は自ら移動パンフレットと称して農閑期に文化講座を開く。さらには羽仁五郎らの講師を招いて夏期大学を組織するなど，地方文化運動を精力的に展開した。

このような活動を続けるうちに，人々の信頼を得た中井はやがて周囲から広島県知事の候補者に推され，立候補するに至る。しかし，結局，知事選挙には落選し，地方文化運動も停頓期が訪れる。その後，羽仁五郎の招きに応じて中井は広島を離れ，一九四八年，国立国会図書館の副館長に就任する。その激務の傍ら，中井はインフォメーション・センターとしての図書館，あるいは機能としての図書館を論じている。そして副館長就任から四年後の一九五二年五月，胃癌のためこの世を去る。

手短に中井正一の軌跡をたどってきた。かつて鶴見俊輔は，中井正一の思想全体を「抵抗，転向，抵抗という三つの部分」に整理した。それによれば，一九三〇年代の中井は「公人として軍国化に対してたたかって言論の自由をうばわれた」。しかし，一九四〇年代の前半，中井は「私人としては戦争政策に組みする立場」へと転じてゆく。いわゆる転向の時期である。そして一九四五年の敗戦以後，中井は「大衆とのむすびつきの中で民主化のための知識人の役割を果たそうとふたたび公人として努力」した[注2]。したがって，思想全体を把握するには，中井正一の「抵抗，転向，抵抗」について議論する必要がある。しかし，本稿では課題を限定し，転向期以前の一九三〇年代における中井正一を中心に論じてゆくことにしたい。とりわけ，本稿では，三〇年代に中井が発表したテクストを中心に彼の思想を再構成している。その際，メディアと思惟形態に関

わる問題系，また中井における機能概念の受容及びその理論的諸帰結に注目している。ただし，テクストが世界内的な存在だとすれば，テクストの解釈はテクストが書かれた時代情況と結びつくはずである。本稿では，中井のテクストから理論的エッセンスを抽出するのみならず，三〇年代というコンテクストに中井のテクスト及び実践を位置づけることにも留意した。

二　メディアと思惟形態

一九二七年から一九二八年[注3]にかけて『哲学研究』に発表された初期の論文「言語」に見出せるのは中井におけるメディアへの関心である。そこで彼は道具的言語観を否定した後，言語媒体の歴史と思惟形態の変容，とりわけディアレクティクの変容について論じている。中井自身がメディアという術語を明示的に用いているわけではない。しかし，中井における言語それ自体への関心は，知覚に対するコミュニケーション媒体の効果を問う，今日のメディア論的思考を想起させるものである。

論文「言語」の前半部分で中井は，「言語の概念的，意味志向的」研究のみならず，「言語の芸術的意味」の研究に注目している。言語における芸術的意味の研究は概念的意味の研究から切り離されたものではなく，両者は「交錯」して成立する。中井正一は言語を伝達器として見る立場を否定する。それによると，従来，言語は「単なる伝達器 Vehikel」とされていたが，「それが単なる壷であったのではなくして，酒でもあった」のである。中井にとって，言語は単に概念的内容を伝達するだけの，いわば透明なものとして考えられていたのではない。むしろ，言語そのものが「感覚的意味」を持ちうることが認められているのである。一九二〇年代後半に発表された中井のテクストから我々が見出せるのは，透明な伝達器としての言語，あるいは意味の地平に従属した思考といったものではない。むしろ，伝達器としての言語という規定によっては隠蔽されるほかはない，言語それ自体への注目である。中井によって書かれた数多くの文章が詩的な表現に満ちており，アフォリズム的な簡潔さと深みによって読者を困惑させるのは，中井の言語観が背景にあるものと思われる[注4]。

道具的言語観とは異なる地平において現れた言語に対する関心は，言語媒体の歴史をめぐる議論へと展開する。論文「言語」のなかで，中井は，「話されたる言葉」から「書かれた言葉」への移行とその革命的な結果に注意を喚起している。その際，中井が手がかりとしたのはギリシアに関するS·H·ブチャーの著作であった。

> 我々は，近代の世界で最も遠く及ぶ影響を與へた發明が印刷の發明だといふことを，當然のやうに考へてゐる。然し我々は，古代の世界が更にもつと大きい發見を――書くといふ術の發見をしたことを，時として忘れる。口言葉から字言葉への移りゆきは，字言葉から印刷された頁への移りゆきよりも，想像力にとつて一層驚くべきことであり，その結果に於て一層革命的であつた[注5]。

ブチャーによれば，「話されたる言葉」から「書かれた言葉」への移行は革命的な結果をもたらした。彼の議論を参照しつつ中井が述べているのは，「書かれた言葉」によって生じた「思惟の領域の変容」として「問答」から「説話」への移行が生じたということである。「問答」は，言うことと聞くことからなっており，二者間における「思惟の交易」である。これに対して，「説話」は，一つのこころの「自己生産」であり，「自己消費」である。「問答」と「説話」という対比は，他人に語られる「外なる言葉」と自らに語りかける「内なる言葉」という対比でもある。要するに，書くことが要求した思惟の領域の変容は，中井において，二者間における「思惟

の交易」としての「問答」から「自己生産」としての「説話」へ，他人に語られる「外なる言葉」から自己に語りかける「内なる言葉」への変容として定式化される[注6]。

口承文化から文字文化への移行に並行する「外なる言葉」から「内なる言葉」への変化を指摘した中井は，更に「印刷されたる言葉」への移行と思惟形態の変化について論じている。この段階ではディアレクティクに焦点が絞られる。「いわれたる言葉」より「書かれたる言葉」，さらに「印刷されたる言葉」への移行と，哲学的問答法としてのディアレクティクから汎論理主義的なディアレクティクへの移行とを中井は重ね合わせている。もっとも，ここで確認したいのは，メディア史的な図式ではなく，言語媒体の変容と思惟の変容を関連づける発想が，二〇年代における中井の著作に見出せるということである。

論文「言語」におけるメディアと思惟形態の問題系は，論文「委員会の論理」で幾つかの修正を経て再び定式化される。それによれば「いわれる論理」「書かれる論理」「印刷される論理」は古代，中世，近代の文化に対応している。それを実践のなかで再編成するのが「委員会の論理」である。「いわれる論理」，「書かれる論理」「印刷される論理」という言葉は，中井の他の論考に散見されるメディア論的思考と同様，ある時代の思惟領域が支配的な言語媒体によって決定されるかのような印象を与える。しかし，仔細に検討するならば，論文「委員会の論理」には単純な技術決定論から逸脱しうる箇所も含まれている。各時代の論理と並行して各時代の社会制度が記述されていることに注目すれば，各時代の思惟に対するメディアの効果のみならず，社会制度の効果が考慮されていることが感得できよう。したがって，論文「委員会の論理」では，思惟に対する言語媒体の効果という視点は単純な形での技術決定論的枠組みの中に位置づけられてはいないのである。他方，「委員会の論理」における文化史的な図式は，上部構造論を思わせる側面もあるものの，経済決定論や社会決定論とも異なっている。そこでは，社会制度の転換期において特定の観念が果たす媒介的役割が重視されているからである。

道具的言語観を否定し，意味の地平に従属することを拒む中井の言語論は，言語媒体の歴史へと展開され，「委員会の論理」では単純な形での技術決定論や経済決定論とは異なる形で定式化された。私見では，中井正一が素描したメディア史的図式はあくまでも図式にとどまっており，その妥当性については疑問の余地がある。しかし，中井の思考がメディア論的発想，さらにはメディア史的発想を含み込むものであることは忘却されるべきではない。この点に関して，近年では中井の現代性を強調する議論が存在している。例えば，現代フランスの思想家，レジス・ドブレによるメディオロジーの発想が既に中井によって先取られていたとする議論がそれである[注7]。メディオロジーとの比較によって中井の問題提起の現代性を再検討するには，おそらく，別の論考が必要となるはずであり，本稿の課題を超える。第二節において我々が確認したのはより限定された事柄である。すなわち，二〇年代から三〇年代に至る中井のテクストには今日のメディア論的思考が含まれており，中井の著作は二〇世紀前半におけるメディア論的思考の先駆的形態，あるいは古典として位置づけられうる，ということである。

三　中井正一における機能概念の受容

次に，一九三〇年前後における中井のテクストに見られる，機能概念の受容とその論理的帰結に注目することにしたい。その帰結は，第一に，関係論的思考への移行であり，第二に，これと結びついた形而上学的区別の批判[注8]である。この批判に伴っているのは，筆者が相互転換の論理とよぶ動態的な思考である。第三は，技術と芸術の領域に対する関係論的思考と二分法批判の適用である。このような中井の思考は，実体としての意識の否定へと発展し，集団的思惟機構の模

索が開始される。機能概念をめぐる問題系は，第二節で検討したメディア論的問題系の後に現れ，独立して展開されたものとはいえ，集団的思惟機構の構想のなかで両者は交差することになる。

『実体概念と関数概念』におけるカッシーラーによると，実体概念では，記憶表象から共通の要素が抽象され，それを一つの類に結合することによって概念が生じる[注9]。この手続きをより高い水準にまで繰り返すことにより，「概念ピラミッド」が現れる。そこでは，概念の意味内容（内包）が少なくなるにつれ，概念の適用範囲（外延）は拡大する。この操作を徹底化すると，「もっとも普遍的な概念は特筆すべき特徴や規定性をもたないということになる」。ここで実体概念は空虚で抽象的なものとなる。この実体概念に対置されるのが関数概念（Funktionsbegriff）である。それは概念対象間の<関係>から出発する思考を前提とする。この思考において，個々の部分は分離されるのではなく，体系における関係構造で把握される。事物はあらゆる関連に先行する自立的実在として措定されるのではなく，観念的な相互性における「関係項」となる。

今日では関数概念と訳されている，カッシーラーのFunktionsbegriffは，中井の論考では「函数」や「機能」という術語で表されている[注10]。例えば，「互いに規定し合ふ関聯的組織に融合する函數形」等の表現にそれはあらわれている[注11]。中井のカッシーラー受容における特徴は，Funktionsbegriffを「機能」という言葉に翻訳することで，事物を相互に依存する諸機能の複合として定義した点である。例えば，窓の概念は，円や四角などの記憶表象に基づくものではなく，通風，展望，採光の三機能の複合として把握される。本稿では詳述しないが，カッシーラーから関係論的思考を摂取した中井は，カッシーラーとは独立に，技術や美学の領域に機能概念を適用し，独自の議論を展開する。

カッシーラーの『実体概念と関数概念』に中井が見出した論点は，関係論的思考のみではない。中井はこの著作から，形而上学的区別の批判についても学んでいるのである。カッシーラーによると「形而上学に特有の手続き」は，認識の領域において相互的にのみ規定される一対の観点を分離させること，論理的に相関するものを事物的に対立するものへと解釈し直すことである。形而上学的区別に対して，カッシーラーは分離された「不動の境界」ではなく「不断に移りゆく可動の境界」を問題にすべきだと主張する。例えば，認識の現在の段階は，「過去のものと較べてみれば『客観的』と見えるのと同様に，将来のものに較べれば『主観的』である」。確かに，ここでは客観／主観を分かつ境界線は不動のものとは考えられてはいない。

形而上学的区別に対する批判は中井の著作にも記されている。中井によれば，「形而上學は傳統的に屡々，思惟と實在，主観と客観，物と精神等を各々分離對立した『もの』として論じすぎた」のであり，「現代に於ける唯物論的考へ方にも，又この形而上的解釋を見出さしめるものが殘ってゐる」[注12]。ここで中井は，カッシーラー譲りの形而上学的区別に対する批判を独自に唯物論批判にまで拡張してみせている。そして，主観／客観という対立概念について中井は，機能概念よりすれば，むしろ消滅し解体さるべきとする。両者は自立した実体的存在ではなく，観念的な相互性において与えられうる関係項なのである。カッシラーにとっては「現在の状態は過去のそれに對して客觀的と考へられると同時に，現在の状態は未來のそれに比して主觀的と考へられる」[注13]。主客は分離すべからざる函数的関係にあり，論理的関係点との相違によって一つの事柄が主観的とも客観的とも考えられるのである。

ただし，ある法則がさらに進歩せる広い領域に妥当する法則によっておきかえられる場合，以前に客観的と考えられたものがまったく主観的なものへと変化して，総ての客観性を失うのではない。以前に無制約的に妥当であったものは，一定条件の範囲に制限されたものとして把握され

るのである。中井はこれを「妥当の階段性」と呼ぶ。

比較される他のものとの関係によって対立物に相互的転換を生み出す思考，筆者はこれを相互転換の論理と呼んでいる。興味深いのは中井がこの相互転換の思考を他の問題に転用している点である。例えば，注意深い読者であれば，中井の文章から，現実と非現実の相互転換，あるいは芸術／非芸術の相互転換などといった，現代的な論点を見出すことが可能であろう。近年，メディア研究において二分法批判の意味における「収斂」の問題が提起されているが[注14]，中井における相互転換の思考は，対立が収斂する側面のみならず，収斂した状態からさらに分裂が生じる側面に注目している点で際立っている。

四　集団的思惟機構：新聞と映画

すでに見たように，実体概念から機能概念への移行は関係論の導入や形而上学的区別の批判などの理論的移動を中井に要請した。次に注目したいのは，機能概念の導入による模写概念の変化であり，それによって導かれた実体としての意識の否定，さらには集団的思惟機構の構想である。

中井によれば，外界の物が意識に鏡のように映されるという従来の模写概念は，機能概念の見地では放擲される。物は実体ではなく機能的関係においてとらえられ，諸要素を全体的体系において把握する「思惟的配置」が新たな意味での模写となるのである。模写は，外界にある関係以前の物を意識に映すことではなく，機能的関係としての物と思惟的配置との対応関係と考えられる。この意味で理解された模写は，今日，しばしば紋切型の批判がなされる単純化された反映論と異なるのは言うまでもない。

実体概念の否定は，実体としての物を映し出す実体としての意識を否定することでもある。意識はもはや実体としてではなく，「行為において発見されたる関係の構造」としての射影，あるいは「行動の射影的関係」として把握される。射影とは意識体験そのものではなく，リアルな事物がパースペクティヴにカットされて現出する仕方である。意識は「全世界系列を射影しうる可能構造」であり，「行動の射影的関係」である。この時，意識の射影構造を媒介するのが自然構成としての身体であり，その身体の機能を拡大するのが道具と機械である。ここで知覚はもはや身体のみならず，道具と機械を含めて考慮されている。論文「芸術における媒介の問題」（一九四七年）――戦前に中井が行った講演をもとにした論考――では，機械時代における射影機構の姿が次のように描かれている。「今や，歴史的段階は，個人的意識段階を乗り越えて，集団的意識段階に向かいつつある。……機械的技術を中に含めて，レンズ，フィルム，電話，真空管，印刷などの機構を貫いて，物質的感覚ともいうべきものが，集団人間の感覚として，表現，観照の要素となり始めた。それらの感覚要素を素材として委員会という近代的集団的思惟の機構は，個性単位の意識を越えたる新たなる性格を，人間社会に導入するにいたった」。中井は，個人を実体的に把握し，個人的意識の集合体として委員会を位置づけたのではない。彼は，実体としての意識を否定した上で，メディアに媒介された集団的思惟の機構を構想していたのである。また，ここでは身体のみならず機械を含めて知覚が捉えられており，しかも，知覚は集団の次元において考察されている。

メディアに媒介された集団的思惟機構という視点から中井のテクストとそのコンテクストを再検討する際に気が付くのは，新聞『土曜日』における実践，そして映画の受容をめぐる理論が集団的思惟機構と密接な関連をもつということである。隔週刊の新聞『土曜日』における実践は，従来は，反ファシズム文化運動という政治的文脈で語られてきた主題であるが，それはまた集団的思惟機構の実践としての理論的意味を持ちうるのである。次に，繋辞の欠如に関する中井による映画の受容理論もまた集団的思惟機構の一構想と考えられる。新聞をめぐる実践と映画の受容

をめぐるこれらの問題は，一見したところ異なる次元の問題のように思われ，実際，従来は両者を関連づける試みはなされてこなかった。しかし，ここでは，異なる領域を横断しつつ理論と実践の往還を通じて発展する思考の運動に注目し，ことなる問題の接点を探ることにしたい。

まず注目したいのは新聞『土曜日』である。美学の理論研究をめざす同人雑誌『美・批評』は，瀧川事件の影響によって，学問的自由の擁護を掲げる第二次『美・批評』となる。この第二次『美・批評』はさらに反ファシズム文化運動である『世界文化』へと発展する。いわば文芸的な議論の空間は政治的な色彩を帯びることとなった。政治化されてはいたが高踏的な限界をもっていた『世界文化』に加えて創刊されたのが大衆的な新聞『土曜日』である。軍国主義的風潮に共感する民衆と批判的知識人の分裂という時代状況にあって，『土曜日』は送り手と受け手，又は執筆者と読者を交叉させることで，知識人と大衆の分裂を乗り越えようと試みた。ただし，執筆者と読者がそれぞれ知識人と大衆に対応するのではない。執筆者と読者の双方は一枚岩ではなかったからである。狭義の執筆陣は，唯物論者と自由主義者を含む世界文化グループと『京都スタヂオ通信』を発行していた庶民的な映画俳優，斎藤雷太郎の合流からなっていた。他方，読者，及び投稿という形式における広義の執筆陣にも，学生や勤労者，女性が含まれていた。さらに大阪や京都の喫茶店に置かれ，時には読者によって遠方に運ばれることもあったという意味で，『土曜日』が生み出す議論の空間は，都市のみならず地方への広がりをもっていたことになる。女性や労働者をもまきこんだ議論の空間であり，地方への広がりをもっていたという点で，『土曜日』を多元的公共圏という視点から検討することは興味深い課題である。もっとも，女性による投稿の数は次第に減少し，『土曜日』それ自体が学生とインテリの遊びとして揶揄される事態も生じている。複数性をはらんだ議論の空間を創出する『土曜日』の試みを過度に理想化することは避けるべきである。

ここで確認したいのは，第一に，多元的な議論の空間を創出する『土曜日』の試みは，単に実体としての個人の集合としてではなく，集合的思惟の形態として捉えるべきだ，ということである。『土曜日』は，単に政治的な実践であるばかりではなく，メディアに媒介された集団的思考の形態なのである。第二に，『土曜日』における政治的実践は，中井にとって集団的芸術をも意味していた。『土曜日』に参加する以前，中井は，新聞＝芸術論を展開していた[注15]。それによれば，まず，新聞は文学として把握される。当時の新聞は企業的利潤に制約されているとは言え，リアリズムを重視する立場から中井は新聞をルポルタージュとして，文学として把握するのである。次に，新聞において複数の記事が配列されていることから中井はフィルムのモンタージュを想起し，そこに新たなリアリズムの企画性を見出している。このように，中井にとって，新聞は集団的芸術であった。新聞における記事の配列が映画におけるフィルムのモンタージュに比較されていることは重要である。ここで，中井による映画の受容理論について確認することにしたい。

論文「思想的危機における芸術ならびにその動向」（一九三二年）で中井は，専門化過程の徹底によって逆説的に生じた大衆化，さらに芸術の領域で進行する商品化といった三〇年代の思想的危機を分析している。この思想的危機においては個人主義機構から集団主義機構への転換が進行しており，それに追いつき追い抜く美学を構築する手がかりとして中井が注目したものが映画である。しかし，中井は映画を無批判に肯定したわけではない。「コンティニュイティーの論理性」（一九三六年）では，タイアップした産業による大衆の動員と馴致を中井は批判した。フランクフルト学派の文化産業論と関連する主題である。しかし，中井はペシミズムに陥ることなく，観客による映画の受容に小さな可能性を見いだそうとする。この問題は，戦後の『美学入門』に継承される。

中井によれば「遠近法の空間」は，確立された個人の視点を前提とし，それによって全世界の

体系が構成される近代の空間である。そこでは，世界の観察者としての主観が確立されている。これに対応する表現が絵画である。次に「図式空間」は，絵画の危機以降に現れたものであり，レンズの見方によって構成される世界像に対応する。個人の視点を軸として構成される「遠近法の空間」とは異なり，「図式空間」で世界を構成するのはレンズの見方，いわば物質的視覚である。カントは感覚を主観的なものだとしたが，この物質的視覚は主観的なものではありえず，物質の制約をうけるのである。物質的視覚は映画の特徴の一つでもあるが，映画の場合，フィルムが編集される点が異なっている。換言すれば，映画では表象の結合において客体の制約をうけるのである。ここで問題となるのが「切断空間」である。映画では，カットとカットが結合される際，文学のような「である」「でない」といった繋辞が欠けている。レンズの見方から構成される世界像としての「図式空間」は，映画の場合，繋辞なしの「切断」によって結合されているのである。制作者が意図をこめてカットとカットを繋ぐこと，あるいはトーキーや字幕が繋辞の役割を果たす可能性もある。これらを前提としつつも，中井は，繋辞なきフィルムの切断を連続するのは大衆の歴史的意欲であり，歴史的主体性だと主張する。

中井による映画理論の場合，創作の仕上げを観客が行うという意味での相互性や集団的「製作」が言及されている。これは映像テクストの受容における相互性であると言えよう。ここで，新聞『土曜日』において積極的に導入された読者投稿と映画理論において構想された繋辞の欠如をめぐる問題の相違を整理することにしたい。新聞『土曜日』における読者投稿は，テクスト生産の局面における執筆者と読者の相互性を実践したものであり，それはテクストの集団的な生産として考えられる。他方，映画理論の場合，映像テクストの集団的生産という論点に加えて，受容という局面における観客のテクスト構築が言語化されていたことになる[注16]。『土曜日』の実践と映画理論を比較した場合，後者では受容という論点が新たに付加されているものと考えられる。

中井の映画論では，テクストの生産と受容という重層的な集団的過程が語られていた。注意すべきなのは，それが単に個人の集合ではなく，主観の崩壊を前提としていることである。個人の主観によって構成される近代的世界像としての「遠近法の空間」の後に現れ，レンズによって構成される世界像が「図式空間」であった。繋辞なき映画の「切断空間」では，カットとカットが観客によって結合される。これはメディアのもたらす物質的感覚と人間的判断の結合からなる集団的知覚である。それは単に個人的主観の集合体であるのではなく，主観の崩壊以後に摸索された集団的な知覚の形式なのである。ここに中井における集団の一つのモデルを見出すことが出来るであろう。委員会という言葉から我々が想像するのは，対面的なコミュニケーションを行う小集団である。しかし，中井による『土曜日』の実践や映画の受容理論を考慮に入れるなら，対面的相互作用を行う文字通りの委員会のみならず，空間的には隔たっているものの，メディアによって媒介された集団的思惟機構へとイメージを拡張することができる。ここは，主観の解体，及び集団的知覚というメディア論的問題と集団的相互行為というコミュニケーション論的問題が交差する地点である。

集団や委員会について考慮する際，機能概念に対する評価の変化についても触れなければならない。既に確認したように，論文「委員会の論理」以前，中井は関係論的思考を導入していた。したがって，中井における集団や委員会は単に実体的なものの集合や部分の総和としての全体としてではなく，相互に規定しあう関係論的な組織と看做す必要がある。しかしながら，中井の委員会は個が全体に規定される一枚岩の構造ではないのである。戦後の文章において，機械時代に適応した理論では主観が解体し「意識のない関係構造」に全体が溶解するのだと中井は述べる。他方，「委員会の論理」に含まれた弁証法的発想を，後年，中井は機械時代に抵抗するものと位

置づけている。論文「委員会の論理」において機能の論理が持つ価値は限定的なものとなっているのである。そして重要なのは，委員会は全体のなかに個が溶解する一元的な関係構造とは考えられてはいない，という点である。ここで注目されるのが主体性に含まれる分裂の契機である。

中井において弁証法的主体性は自己関係的な否定によって分裂する過程であった。それを組織に適用したものが集団的主体性である。無限に回帰する分裂の過程という発想は「委員会の論理」にも含まれており，それは集団的コミュニケーションの次元における提案，計画，報告，批判という循環的な過程に対応する。委員会の集団的コミュニケーションにおける分裂は静態的な関係構造に抵抗するものである。『土曜日』における読者投稿の試みはこの分裂の契機に対応するものと考えられることであろう。

注

(1) 中井正一「集團美の意義」『大阪朝日新聞』一九三〇年七月六日。

(2) 鶴見俊輔，「解説」久野収編『中井正一全集４』美術出版社，一九八一年，三五七頁を参照。なお，公人と私人を区別する点については批判もある。

(3) 一九二八年はソシュール『一般言語学講義』の小林英夫による翻訳が刊行された年でもあった。これ以降，中井の論考にソシュールの名が散見されるようになる。例えば，「発言形態と聴取形態ならびにその芸術的展望」（一九二九年），「意味の拡延方向ならびにその悲劇性」（一九三〇年）などである。

(4) 本稿では，中井による詩的記述を詩的記述によって語るという方法を回避した。確かに，道具的言語観を否定する立場から詩的実践に赴くことは遂行的矛盾を避ける一方策である。けれども，詩的実践への耽溺はある種の貧しさを生み出す危険性がある。

(5) S·H·ブチャー著，田中秀央・和辻哲郎他訳『ギリシア精神の様相』岩波文庫，一九四〇年，一五八頁。なお，初版は一九二三年。

(6) 「外なる言葉」と「内なる言葉」の「溶融」をアリストテレスに見出しているとは言え，「外なる言葉」と「内なる言葉」という二分法的対比はやはり図式的である。しかし，この主題は，論文「委員会の論理」においてより精緻化されて回帰する。そこでは，「討論」と「思惟」へと術語が変更されるのみではない。両者の区別のみならず，連続性が析出されているのである。

(7) この議論は，ドブレの著作への書評において上野俊哉が中井に言及したことに端を発する（上野俊哉「レジス・ドブレの『メディオロジック宣言』を読む」『Inter Communication』，十二号，一九九五年）。その後，佐藤晋一は，中井を主題とした三番目の著作のなかで，中井とドブレの一致点を強調している。「両者とも期せずしてメディアの技術的な進展を論じるのではなくして，その進展・革命が社会的・歴史的な影響力を持ち，人間の生存の仕方にまで，従って思考それ自体の変革にまでそれが及ぶということに焦点を定めて論じているのである」（佐藤晋一『中井正一・「立法主体」の論理学』郁朋社，二〇〇一年）。もっとも，新しい思想との関連から中井の現代性を指摘する試みはこれ以前にも繰り返されており，流行思想に結びつけて中井を再評価する試みは中井の思想にはそぐわないとの批判もある。私見では，新たな思想との比較検討から中井研究に新視点を導入し，従来，見落とされていた点を浮き彫りにする試み自体は全否定されるべきものとは思われない。しかし，両者の同一性のみが強調され，微細な差異性が隠蔽されることは深刻な問題を生み出す。ドブレと中井の同一性のみが指摘されるのであれば，中井を研究することの意義は雲散霧消しかねないのであり，両者の差異があってこそ中井を研究する意義が生まれるものと思われる。今後の課

題としては，ドブレと中井の類似性を指摘する段階を超え，両者の微細な差異を問題にする必要がある。なお，ドブレの主著として次を参照。Debray, R., *Cours de Médiologie Générale,* Éditions Gallimard, 1991.

(8) 二元的対立への批判という点では，中井が「機能概念の美学への寄与」を書く二年前の一九二八年，すでにジンメルの『カントとゲエテ』の翻訳書を刊行していた谷川徹三の仕事が想起される。

(9) エルンスト・カッシーラー，山本義隆訳『実体概念と関数概念』みすず書房，一九七九年。

(10) 山本義隆が「関数」という語を採用した後も，「機能」という術語を選ぶ，馬原潤二のようなカッシーラー研究者が存在していることを付記しておく。

(11) 中井正一「機能概念の美學への寄與」『哲学研究』，一九三〇年，四三頁。

(12) 同上，四四頁。

(13) 同上，四六頁。

(14) Livingstone, S. M., "The Rise and Fall of Audience Research: An Old Story With a New Ending", in Mark R.Levy and Michael Gurevitch(ed), *Defining Media Studies : Reflections on the Future of the Field,* Oxford University Press, 1994, pp.247-254.

(15) 中井正一「藝術の集團性 『壇』の解體について（その四）」『大阪朝日新聞』一九三二年一月二十二日。

(16) 新聞における記事の配列がモンタージュのメタファーで語られていたことを想起したい。中井自身は明示的に述べてはいないとはいえ，『土曜日』においてもまた受容の局面における記事の結合という問題を考えることが出来るのである。

参考文献

中井正一，久野収編『美と集団の論理』中央公論社，一九六二年。
――――，辻部政太郎編『生きている空間―主体的映画芸術論―』てんびん社，一九七一年。
――――，中井浩編『論理とその実践―組織論から図書館像へ―』てんびん社，一九七二年。
――――，富岡益五郎編『アフォリズム』てんびん社，一九七三年。
――――，『美学入門』朝日新聞社，一九七五年。
――――，久野収編『中井正一全集　1　哲学と美学の接点』美術出版社，一九八一年。
――――，久野収編『中井正一全集　2　転換期の美学的課題』美術出版社，一九八一年。
――――，久野収編『中井正一全集　3　現代芸術の空間』美術出版社，一九八一年。
――――，久野収編『中井正一全集　4　文化と集団の論理』美術出版社，一九八一年。
――――，鈴木正編『増補　美学的空間』新泉社，一九八二年。
――――，長田弘編『中井正一評論集』岩波文庫，一九九五年。